
時の扉

くつした

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の扉

【Nコード】

N6276V

【作者名】

くつした

【あらすじ】

わたしは受験勉強のため、公民館の図書室に訪れました。トイレで用をすませた後のことです。誰もいなかったはずのトイレから、すうーッと見たことのある顔が通り過ぎて行きました。

その日は公民館の図書室で受験のための勉強をしていました。友達二人と昼間からやっていたのですが、ちょっと頑張りすぎたため、いつのまにか夜になっていたことに気がつきませんでした。これがかもし図書館でしたら、きつととうに追い出されていることでしょう。図書室には自分たち以外には誰もいませんでした。そろそろ引き上げようかと話し合い、帰る前に一人でトイレへ向かいました。トイレにも誰もいません。個室の扉はすべて開いていますし、物音といえば換気扇が回っている音だけ。もしかすると、公民館には自分たちと職員の人たち以外にいないのかもしれませんが。ゆっくりと用をすませました。

洗面台で手を洗っているときでした。ふとなにげなく鏡を見ると、自分のすぐ後ろを、見たことのある顔の人物がすうーッと音もなく通っていきます。そいつはこちらのことなどまるで気がついていないようで、見向きもせずにトイレから出て行きました。いつの間にトイレに入ったのでしょうか。あるいは、私よりも先にいたのに気がつかなかったのでしょうか。どちらにせよ、まったく気がつきませんでした。さすがにびっくりして、しばらくは呆然としていたのですが、あまり深くは考えずに図書室へ戻りました。

二人の友達と冗談を言い合いながら図書室を出ました。公民館の出入り口の自動ドアあたりまで来た時のことです。背後から強い視線を感じました。どうやら二人の友達は気づいていないようでした。わたしは気になり、後ろを振り返りました。そのときです。

（だめだ、振り返っちゃいけない！）

わたしはいつの間にかにそんな思いにとらわれていました。どうしてそう思ったのでしょうか。まったくわかりません。もしかしたらただの直感かもしれません。なんにせよ、自分はすでに振

り返ってしまっていました。

先ほどトイレで出くわしたあいつがいました。誰もいないと思っていたトイレから出て行ったあいつです。やはりどこかで見た顔でした。ただ、能面のようにまるで表情がありません。いったい、いつ、どこで見たのでしょうか？

そいつはわたしたちになんの反応も見せず歩いていきます。音楽室へ向かっているようでした。そいつはしばらく音楽室のまえに立っていました。いったいなにをしているのだろうか？ そう思っていると、やがてそいつは扉を開けて室内に入っていました。ゆっくりと閉まる扉がやけに印象強く残りました。

二人の友達に、悪いけど先に帰ってくれないかと言い、追いかけることにしました。どうして追いかける気になったのか、自分でもさっぱりわかりません。ただ、身体が勝手に動いていました。

足音を忍ばせながら音楽室へ近寄りました。扉へ耳を寄せて中の音を聞き取ろうとしました。物音ひとつしないどころか室内に誰かがいるという気配さえ感じられません。

中を覗きたいという欲求に勝てず、ゆっくり、慎重に扉を押しました。腕が通るかとおらないか程の隙間を開け、中を覗きました。はたして中は真っ暗で、誰かがいるようには見えませんでした。こんな暗闇の中で、あいつはいったい何をしているのだろうか？ 目を凝らして暗闇を透かそうとしましたが、うまくいきません。中ほどまでは見えますが、端までは見えそうもありません。ともすればあいつは端のほうにいるはずなのですが、これではまるで――

——まるで誰もいないかのようです。

そんなはずはありません。確かにあいつはここへ入っていきました。入り口は一つしかないのも、もし外へ出たのならあいつと顔をあわせるはずです。怖くなりましたが、好奇心のほうに勝っていました。誰かいますか？ と恐るおそる声を出しました。しかし返事はありません。誰もいないなんてことは、絶対にありえません。確かにこの部屋へ入ってゆくのを見たのです。

覚悟を決めて部屋に入りました。後ろ手で扉を閉めます。外からの光はすべて遮断され、部屋中が真っ暗になりました。

音楽室に入ったことは一度だけあるのですが、防音のためか窓が一つもないので扉が閉まってしまおうと外からの明かりはまったくなくなってしまう。

壁に手を這わせて灯りのスイッチを捜します。スイッチはすぐに見つかりましたが、灯りを点けるのは躊躇われました。躊躇う必要はないのですが、指はなかなかスイッチを押してくれません。なぜ押してくれないか、それは——

部屋が明るくなったら、実は誰もいないんじゃないか？

そんな妄想を抱いてしまったからです。

あいつが室内に入っていったのを確かに見たのだから、そんなはずはありません。勇気を振り絞ってスイッチを押しました。

予想通りといえбайのしょうか。部屋には自分以外の誰もいませんでした。

ゾッとしました。なぜ誰もいないのでしょうか。誰かが確かにこの部屋へ入ったというのに……。窓はなく出入り口は一つしかない

というのに……。

あいつは消えてしまったのです。

恐慌に陥るまえに、ふと気がついたことがありました。

どうしてそのことに今まで気がつかなかったのでしょうか。いや、もしかしたら本当は気がついていたのかもしれませんが。気がついていながらも、認めたくなかったただけなのかもしれません。

あいつの顔——あれはどこかで見た顔なんてものではありませんでした。あの顔は、わたしの顔でした。

世界中を探せば煮ている人は何人かいると聞きますが、あの顔は確かに自分の顔でした。似ているなんていうものではなく、まさしく自分の顔なのです。わたしの顔したやつが誰もいなかったはずのトイレから出て行ったのです。「誰もいないと思っていた」ではなくて、確かに「誰もいない」トイレでした。誰もいない場所から突然ふつと現れたやつならば、煙のように消えてしまってもおかしくありません。どうしてそんなやつを追いかけてきてしまったのでしょうか。

ともあれ、あいつは消えてしまいました。自分の顔を持ったあいつはもう消えてしまったのです。

不思議なこともあるもんだと、あいつは完全に消えてしまったのだとわたしは決めつけ、安心して音楽室を出ることにしました。正直に言いますとまだ怖かったのですが、いなくなってしまったものを怖がる必要がどこにあるのでしょうか。わたしは心持ち胸を張ります。

音楽室の入り口を振り返ると、扉がほんの少しの隙間をあけていました。驚き、身体は緊張のあまり固まってしまいました。いえ、違います。あけていたのではなく、今まさに少しずつ、すすすまさに隙間をあけているところでした。けれど、友達が様子を見に来たのだらうと思い、すぐにリラックスしました。もしかしたら怖がっていたところを見られていたかもしれせん。恥ずかしいのになにか冗談を言って誤魔化そうと決めました。さて、なんと行ってや

りましようか。

しかし、隙間ぬツと覗いた顔を見た途端、考えていた冗談は跡形もなく立ち消え、身体は再び凍りつきました。

わたしは、自分が恐怖の叫びをあげていることになかなか気がつきませんでした。いつのまにかに膝をおっていたらしく、ぺたりと音楽室特有の冷たい床を感じていました。

扉の隙間から覗いたのは、まるで表情のない能面のような自分の顔でした。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6276v/>

時の扉

2011年8月9日03時24分発行